

研究・調査報告書

報告書番号	担当
373	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳) Age-period-cohort modelling of alcohol volume and heavy drinking days in the US National Alcohol Surveys: divergence in younger and older adult trends. National Alcohol Surveys (国立アルコール調査)における深酒の日数とその時の飲酒量の年齢・年次コホートモデル； 成人の若年層、老年層の傾向の相違について。	
執筆者 Kerr WC, Greenfield TK, Bond J, Ye Y, Rehm J.	
掲載誌 (番号又は発行年月日) Addiction. 2009 Jan;104(1):27-37.	
キーワード 大量飲酒、アメリカ合衆国、飲酒パターンの変化、頻度質問	
要 旨 目的： 大量飲酒する日数と、その時の飲酒量の傾向を年齢、時代、コホート、人口統計学にまで分解すると、合衆国の飲酒パターンの変化に力学に作用するものに対する重要な見解が示されます。 デザイン： 本研究では1979—2005年の26年間に行われた6つのNational Alcohol Surveysのデータを利用し、合衆国で行いました。 測定法： 総合的かつ飲料に限定した目盛り付き頻度質問から5drink以上と8drink以上の飲酒をした日数とその時の飲酒量を得ました。 結果： 傾向分析では、飲酒量平均値は26歳以上では低下し続けるものの、18～25才では飲酒量と5drink以上の飲酒をする日数の増加が示されました。年齢・年次コホートモデルでは1975年以降に生まれた者に潜在的なプラスのコホート効果があることが示されました。しかしながら、年齢・コホート相互作用の代替となる解釈、すなわち最も古いコホートで1920年代に調べられた時よりも、急激に飲酒量が減ったという選択的解釈も除外できません。女性に関してだけみると、1956-60年出生コホートではその直前やその後生まれた者より飲酒量が多いように見えます。また、モデルではこうした飲酒量測定を行う際に収入、民族性、教育、婚姻状況が重要であることが示されました。 結論： 最近の調査における若年成人の深酒の増加は、アルコール政策に対する重大な難問を呈しており、今後の米国におけるアルコール消費量の増加のもととなるかもしれません。	